



自己変革の夢

# 館山一子

佐波洋子

新  
歌人群像

館山一子たかやまかずこは明治二十九（一八九六）年三月二十一日、千葉県東葛飾郡土村逆井（現在柏市に編入）に生まれた。父治平、母とみの長女で、本名日暮いちひぐらし。家の屋号は「市平」と言い、代々名主の家柄であった。高等科を卒業すると補習科（松戸高校前身）へ進む。しかし、両親は弟の丈夫の教育のため東京に住み、一子は祖父母と妹の美千代と一緒に逆井の家に残った。三人の面倒を見るために一年後に退学、雇い人とともに農業に従事する。生活に根ざす女流歌人としての素地はこうしたところから作られていったともいえる。

## 歌の出發

大正三（一九一四）年、十八歳のときに、家事見習いのため東京・麻布本村町阿川氏宅に住込むが、そこで腎臓を病み、大正五年順天堂で右腎臓摘出手術を受ける。翌年東京にいた両親と浅草に住む。病院で歌を書きつけ、前田ひさのという歌人に添削の手ほどきを受けたという。退院後、前田夕暮主宰の「詩歌」に入社するが、大正七年「詩歌」は廃刊、夕暮は歌壇から隠退する。一子は八年、「詩歌」を退社。一時尾山篤二郎の「短歌雑誌」に投稿し、のちに「国民文学」



に加わり、窪田空穂に師事することになる。一子は終生師として空穂を敬仰していた。大正十五年「槻の木」、昭和二十一年「まひる野」と空穂系の雑誌が創刊される。大正九年対馬完治創刊の「地上」に一子は移る。このころからすでに、自分の道を真つ直ぐに求めてやまない姿勢が見える。

一子は、大正十年一月、窪田空穂の世話で同門の田辺駿一と結婚する。駿一は幼時に母を亡くし、祖母や父に育てられ、二十歳のころから櫛職人として住込みで働いていた。一徹な江戸職人氣質の愛すべき青年は、空穂の一方ならぬ寵愛を受けていたようだ。時代は第一次大戦が大正七年に終結したが、米騒動が起きるなど庶民の生活は苦しく、駿一も貧しかった。

偽りの無き世に住まわかく思ひて嫁ぎ  
し事の今はうれしき  
わが夫と共にし見るやこの朝の雨にけ  
ぶれる遠き木立を

掲出歌は歌集には掲載されていないが、駿一との結婚以前にまとめた「一子集」と自署した綴りの中のものである。しかし、この若い希望に満ちた生活も長続きせず、一子の病弱と駿一の櫛作りの生活の不安定さや名人気質

等による貧困、二人の育ち方の違いが影を落とす。

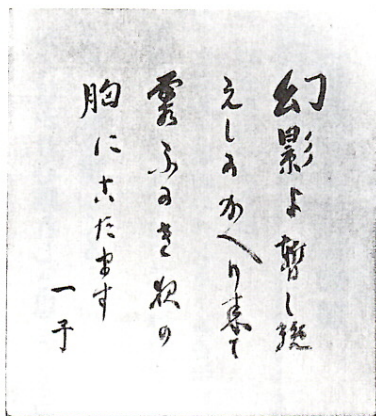
黄楊の木の外れて木片多く出ぬ薪にせ  
むと思ひ干しつ  
叱られむ事と思へどわが夫の着物持た  
ねば買はむと思ふ  
みづからの心押へてあらむとしおさへ  
かねつつ妻をいぢめぬ 駿一  
櫛挽くがきらひな吾の櫛挽かねば生き  
て行かれず悲しき事なり

### 短歌革新の一翼に加わる

昭和二（一九二七）年六月、駿一・一子は階級的意識に基づく歌誌「黎明」を創刊する。駿一、三十三歳。一子、三十一歳の時である。歌壇は斎藤茂吉主導の「アララギ」、モダンズム歌人の台頭、口語歌運動から派生したプロレタリア歌人という鼎立の時代に入っていた。大正から昭和、まさしく新しい時代の夜明けを実感した命名であろう。大熊信行・矢代東村・大久保桃策ら多くの文人が出入りした。大熊信行は、自ら主宰する「まるめら」において短歌革新の方向を高く評価した。

昭和三年十月、新興歌人連盟が結成されるが、十一月には分裂し、無産者歌人連盟が組織され、十二月に「短歌前線」を創刊する。これはプロレタリア短歌運動の出発点となった。「階級闘争の先端に立つて大衆に呼びかけるこの時代のもっとも先鋭的な武器」という坪野哲久の影響で口語非定型作品が多い。この時代の論争の激しさとエネルギーを思わせるが、翌年五月「プロレタリア短歌集」

（紅玉堂）を発行。これは「短歌前線」とともに当局より発禁処分となった。一子と駿一も息詰まるような短歌史の渦中に居り、「黎明」も短歌における階級的観点を貫くというプロレタリア文学運動の一翼を担った。昭和四年九月、一子は第一歌集「プロレタリア意



一子直筆の色紙

識の下に』を紅玉堂から出版して新人として注目される。この年、一子は膀胱結核を発病し、病床での出版だった。

日夜痛烈な痛みが私をさいなむ今はもう少し生きたいと思ふ  
 生き地獄だ生き地獄だと言ひながらふとんの上に泣きくづれる

束の間の言論の自由な時代だったが、それは大恐慌の時代でもあった。

歌よみの我らを前にそのやうな大きな事をあなたは言ふのか  
 女のわたしにどれだけのことが出来るか一つやうて見やうと言ふ氣だ  
 生きろと言ふ夫の言葉、自分ももう少し生きたいと思ふ  
 泣くにはまだ早い、とはいへ夫が汗水流して働いた金を体のためにみんな費やしてしまふ現在だ

「自己清算時代一、二、三」という小題の衝動感からも一子の生き方の凄まじさが思われる。「歌よみの我らを前に」と敢然と言いつつ放った姿勢。プロレタリア短歌とは、その意識において作られ、作る歌であるという自覚

と、誇りと、その行動の限界を知る聡明さが言われた言葉である。階級闘争と文学運動を自己の裡に統一させようとし、情熱を理論化しようとした。生活苦、病苦、女性の地位の向上、死の問題、それらとの闘いだだったが、窪田空穂は「私は胸を打たれるような歌を見ることが出来なかった。(中略) 熱意を起させられるには、更に何物かがあると思った」(『短歌雑誌』)と厳しく書くがそれは愛情からの指摘であつたと思われる。この歌集以後、定型短歌の表現に戻る。それは、一子が考えていた民衆詩としての口語歌に、散文化や詩に傾きがちなことへの、見直しだったのである。

昭和四年、プロレタリア歌人同盟に参加したのを機に雑誌「黎明」を廃刊。昭和六年満州事変勃発を境として政治的弾圧が強まり、さらに昭和八年の大弾圧以後発禁・検挙に拍車がかかり、プロレタリア文学運動は急激に後退して行った。こうした状況下で貧困と病弱と闘いつつ、女の立場の弱さへの改革を目指す中で、夫との生活に限界があつたのである。先進的であるが故に、一子は自己を清算しつくした上で離婚に踏み切り自分の道を選ぶ。それは同時に連帯を目指す運動の核の分裂をも示す。昭和十一年に離婚、一子四

十一歳であつた。

かくばかり心離れしと思ふとき涙いち  
 はやく眼を浸しくる

昭和十二(一九三七)年、坪野哲久の「鍛冶」に初めて館山のペンネームを用いて参加し、以来館山一子を使う。

### 『新風十人』に参加

昭和十五年七月発刊の『新風十人』は、当時の新人、篠井嘉一、加藤将之、五島美代子、齋藤史、佐藤佐太郎、館山一子、常見千香夫、坪野哲久、福田栄一、前川佐美雄が参加した合同歌集である。一子は「彩」三十一首を載せている。翌十六年五月に出した第二歌集『彩』とほとんど重なっている。

幾片の白骨と化して戻り来し骨髄を人  
 ら捧げ来たるも  
 砲煙のたちこむる刹那くづれ伏すや屍  
 となりし兵を見おくる  
 古きものにそむきて立てばおのづから  
 支へ解かれて身をもみにけり

『新風十人』は芸術派的思潮と時代に対す



る抵抗の意味も加えて、低迷する歌壇に新風を吹き込んだ。

あまが  
天駆けるわが心かもあはれなる夜の夢  
にして人と見えつ

幻影よしばし絶えしが甦り来て霜深き  
夜の胸にこたます

かい抱く虚空のみにしてわが日々のさ  
びしき極みに今朝は眼を据う

しみじみと見あげてあるは月ながら心  
のたけをわれは捧げぬ

自序に「小説的意義を附与すべきことを念願しながら作歌をつづけて来た」とある。



一子が創刊した「郷土」は、2006年通巻511集で59年間の幕を閉じた。

瑞々しく清潔感のある相聞の揺れが強く印象付けられる。「彩」は好評で「中央公論」にも掲載された。

### 自己変革

国境をはるかに越えて迫りくる波あり  
春の岸辺を洗ふ  
『季花』

昭和二十年八月終戦。時代の思潮を詠い上げた一子の代表歌である。昭和十九年郷里の日暮家へ戻った一子は、戦時下の栄養不足も伴って、左足がカリエスに侵され、松葉杖を使っていた。

昭和二十二年四月、一子は「郷土」を創刊。その前年に桑原武夫の「第二芸術論」が発表されたが、これに対し一子は「郷土」（昭和二十三年四月号）に「第二芸術論是非」という一文を掲げている。掲出歌は第三歌集「季花」（昭和二十六年十一月刊）の巻頭のものである。

天涯に恋ふるやひとり今夜しも枕上  
に頭つ幻影を捉へつ  
『七月』  
精根もつきはてにしと思ふとき庭の隅  
隅季花に明れる

人間の終のねがひを夫婦におかず親子  
におかず天地におく

実質上の第三歌集『七月』は生存中に出されず没後、全歌集（昭和四十四年五月刊）に収められた。四十代後半の人間として女としての心情の表白がもつと戦後の早い時期に出なかつた事が惜しまれている。歌集『彩』では相聞歌を中心に女の情念を詠い上げたが、『七月』は翳の部分を見せ沈潜し、昇華された心境を示す。そして『季花』は象徴的な作品が多く見られる。「国境をはるかに越えて」の歌は巻頭に収められているが、哲久の影響もあるが、自己変革の過程で自ずと変化したもののようだ。一子は昭和四十二年十一月十四日、療養中の胃潰瘍が急変し逝去する。七十一歳だった。『季花』以後から晩年の作品を挙げたい。

誰も誰も平和を希ひ誰も誰も戦争の予感に怯えて暮らす

かつて見ぬ美しきなり息絶えし母の面輪の玲瓏として

のりこえてわが先を行かむ若人に渾身の力こめてもの言ふ

（さば・ようこ）「かりん」同人